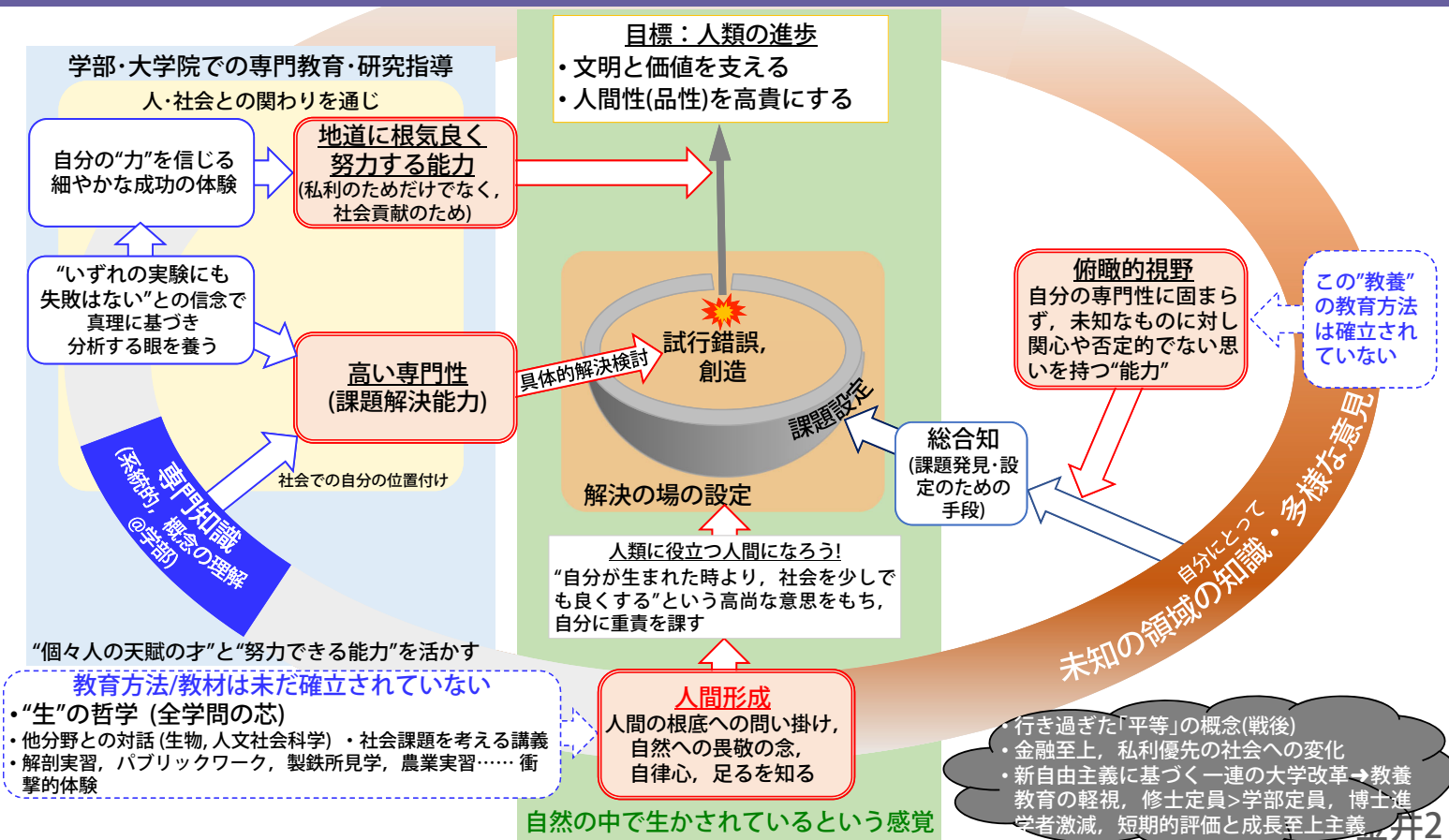


令和CAST「社会にインパクトある研究」第5回討論会
「大学教育では専門教育に加えて何を教えるか/育むべきか」

2022年8月4日(木) 13:00-16:00 WEB

東北大学大学院工学研究科
先端学術融合工学研究機構(令和CAST)
社会インパクト推進ユニット

俯瞰図：学問の深化により、自律した人が増え、“持続可能で心豊かな社会”の創造へ近づくために



俯瞰図：学問の深化により、自律した人が増え、“持続可能で心豊かな社会”の創造へ近づくために

【説明】「社会課題を解決し、人類の進歩、文明と価値を支える、人間性(品性)を高貴にする」ために大学は、いかなる教育をするか、という観点でまとめた図面です。

左の水色の部分は、現在の学部・大学院での専門教育・研究指導で実施されている教育で、まず学部において、系統的に専門知識を修得し、特に応用できるようにそれらの概念を理解します。そして研究室に入り修士課程では、「高い専門性をもって課題を解決する能力」の修得を目標とします。この修士課程の教育は日本独自で優れたものと言えます。と同時に、“いずれの実験にも失敗はない”という言葉もありますが、失敗も含め様々な実験を通じ、真理に基づいて分析する眼を養います。そうした研究を通して、自分の“力”を信じることができる「細やかな成功」を体験します。それが、やがて社会に出てから、「地道に根気良く努力する能力」に結びつくと期待できます。

この左側の赤い囲みの2つの能力を修得して社会に出て、様々な課題や深刻化する社会課題が解決できるか、というと、そう簡単ではありません。これら課題の解決は、真ん中の「るつぼ」で化学反応を起こさせます。そこに必要なのは、「その人の専門の課題解決能力」です。しかし、それだけでは、課題は解決しません。それ以前に、何を問題設定すれば、課題が解決できるかを考える必要があります。そのために、「俯瞰的視野」が必要で、自分の専門性に固まらず、未知なものに対して関心や否定的でない思いを持つ“能力”によって、自分の専門のみ拘束することを排し、自分にとって未知の領域の知識・多様な意見をもとに、課題発見・設定する「総合知」を得る必要があります。ではこれらで「るつぼ」の中で社会課題が解決するか、というとまだ足りません。

元々、この「るつぼ」という解決の場を設定する気概が必要です。すなわち、「人類に役立つ人間になろう!」と自ら欲する「人間形成」が必要で、そのためには、人間の根底への問い掛け、自然への畏敬の念、自律心、足るを知ることが重要となります。地球環境問題の解決のためには、自然への畏敬の念、すなわち、自分が自然の中で生かされているという感覚が必要となります。この後者の2つの赤い囲みの中の能力は、まとめて「教養」といわれますが、いまだこの“教養”の教育方法は確立されてはいないこととなります。

一方で、右下にあるように、戦後日本の行き過ぎた「平等」の概念によって、「自分が生まれた時より、社会を少しでも良くする」という高尚な意思をもち、自分に重責を課す意識が薄くなりました。しかし、若者は“個々人の天賦の才”と“努力できる能力”を活かして、社会を良くするという責任があることを自覚する必要があります。

また、1990年頃から、金融至上、私利優先の社会への変化、新自由主義に基づく一連の大学改革が興り、教養教育の軽視、修士定員>学部定員、博士進学者激減、大学の成長至上主義が興り、益々、こうした図式の中での大学教育に基づく人間形成が難しくなっています。そこで、いかなる教育が必要なのか、を討論していきたい。